



ありふれた殺人

同性婚

春日信彦

ソープ嬢殺人事件

昨年(2019年)の12月25日(日)に福岡市中洲にあるソープランド“クイーン”でソープ嬢、亜理紗(本名; 木山智子、22歳)が絞殺された。この事件はすぐに犯人が検挙されるものと多くの市民は思っていたが、なぜか、6ヶ月ほど経つが事件の解決の手がかりさえつかめていない。福岡県警は彼女の男性関係を徹底して捜査したが事件に絡む男性は浮かび上がらなかった。

警察庁キャリアの野秀文、愛称コロнда君は警視庁、道府県警が扱う事件に関しては一切かわっていないが、不可解な事件に関して自分で捜査する悪い癖があった。彼は司法試験に合格した法学士ではあるが、根っからの文学青年でもあった。興味ある事件が起きると文学的な興味からついしゃべるのであった。今回のソープ嬢殺害事件に関してもこっそり調べることにしたのである。

書齋で何ヶ月も事件のストーリーを考えているうちに、いてもたってもいられず、福岡県警本部長の意見をこっそり聞きに行くことにした。本部長は的野新三郎といい秀文の叔父に当たる。コロダ君は糸島市前原にある本部長の自宅にお邪魔し事件の具体的な内容を根掘り葉掘り聞きだした。

「例のソープ嬢殺害事件ですが、どうして手がかりがつかめないでいるんでしょうね？私思うには彼女の彼氏が殺害したと思っているのですが・・・」コロダ君は誰もが思うことを言ってみた。「確かに、その通りだと思うよ。だが、彼女の男性関係を徹底して捜査したんだが、まったく手がかりがつかめないんだな。狐につままれたような事件だよ」本部長は眉間に皺を寄せてお仕上げの心境を打ち明けた。

「差し支えなければ、事件について少し教えていただけませんか？」コロンダ君は警察が調べた内容が知りたくてうずうずしていた。「まあ、話してもいいのだが、あまりにも単純な事件で拍子抜けするよ。12月24日、土曜、ソープランドクイーンに若い男が亜理紗を指名して、120分コースを25日の午後7時30分に予約した。25日、午後7時15分ごろ現れた彼は会員手続きを終えて、入会金1万円と入浴料12万円をカードで支払った。

お客と亜理紗は7時30分に入室し、120分後、亜理紗は“お客様がお帰ります”とスタッフAに電話して、9時30分にこのお客を見送った。そして、お客は待合室でサービスについてのアンケートを書いて出て行った。これはスタッフAの証言なんだが。次の予約まで時間がある場合、控え室で待機することになっていたが、30分ほど経っても亜理紗は一向に控え室に現れなかった。

そこで、スタッフAが亜理紗を電話で呼び出した。だが、まったく応答がなかった。彼は不安になり客室に行くと彼女はベッドで死体となっていた。発見した時刻は10時10分過ぎというところだ。それと、検視の結果、絞殺による致死、及び死亡推定時刻は9時30分前後と判明した」本部長は単純な事件を淡々と話した。

「確かに、単純な事件ですね。スタッフAの証言が事実だとすれば、亜理紗はお客を見送ったわけだから、お客はホシではありませんね。殺害は9時30分から10時10分の間に行われたことになりますね」コロダ君は気づいた点を指摘した。「そうだよ、話からすればホシはお客じゃなくて、店内にいた誰かということになる。一番くさいのはそこにいた二人のスタッフだが、彼らはお客が出た後、亜理紗の客室には入っていないと言うんだな。受付カウンターには防犯カメラが設置されており、二人の行動はすぐに確認できた。その時間、二人はずっと防犯カメラに写っていた。

スタッフ二人以外の人物が40分以内に侵入し絞殺したと考えた場合、考えられる人物として、1階の控え室にいた二人のソープ嬢と、1階でお客を取っていたソープ嬢とそのお客ということになる。最初に、二人のソープ嬢だがこれも白なんだな。控え室にもカメラ設置されていて、9時30分から10時10分の間、二人のソープ嬢は防犯カメラに写っていた。

次に、1階でお客を取っていたソープ嬢とお客だが、お客は10時に帰った。お客がホシだとすると、9時30分から10時までに殺害したことになるが、この客は1階にいて殺害された亜理紗は2階にいた。ということは、1階から2階に階段で上がらなければならない。ところが、階段にも防犯カメラが設置されており、その時間お客の姿はまったく映っていなかった。

お客を取っていた彼女が殺害したとすれば、9時30分から10時10分の間に殺害したことになるが、彼女も1階から2階に上がるには階段を使わなければならない。やはり、その時間は、彼女も階段の防犯カメラには写っていなかった。また、外部からの進入も考えてみたが、その時間内で防犯カメラに不審人物は誰一人写っていなかった。

と言うわけで、スタッフAの証言が嘘と仮定しての捜査もやってみた。となれば、9時30分にはすでに死んでいたことになるから、まず考えられるホシは9時30分に帰ったお客だ。そのお客は亜理紗の彼氏ではないかと推察されたわけだが、いまだ、その男の所在はつかめていない。携帯の履歴から探り当てた唯一の男が佐伯正一(43歳)と言う男だ。その人物は月に5回ほど来る常連客でパチンコ店の専務だった。彼の話では、近々、彼女と結婚する予定だったというんだな

。

同僚のソープ嬢たちにも亜理紗について聞いてみたんだが、彼女たちが言うには、顔はとてもかわいいが、性格は男みたいで何でも割り切って考えるタイプだったそう。人生はお金よ、と書いていたらしい。男性関係については、一度も話さなかったそう。どうだね、何か気にかかる点はあるかね」本部長は捜査のポイントをゆっくりと話した。

「そうですね、おそらく、佐伯正一との結婚話がとんとん拍子に進み、付き合っていた本命の彼氏にそのことを打ち明け、別れてほしいとお願いした。それを聞いた彼氏は精神的に錯乱し、彼女を奪われることに耐えられなくなり、思い余って、亜理紗を殺して自分も自殺する決意をした。その結果、亜理紗を奪った佐伯正一への復讐の意味で、客室で彼女を絞殺した。この推察は当てはまりませんか」コロダ君はこれが最も妥当な推察と思っている。

「そう考えられなくも無いが、亜理紗のマンションを徹底的に調べたが、男の代物は陰毛一つ出てこなかった。トイレも隅から隅まで調べたが、男の陰毛も皮膚のカスも出てこなかった。バスも調べたが男の陰毛も髪の毛も出てこなかった。一番の手がかりと思った携帯電話の履歴だが、男への履歴は佐伯正一ただ一人で、履歴で一番多かったのは、彼女の親友の篠田ゆりだった。彼女は小学校からの親友で、亜理紗の愚痴を聞いてあげていたそうだ」本部長は少し興奮気味になってきた。

「絞殺ですから、自殺じゃありませんね。彼氏じゃなければ、いったい誰が殺したんですかね？依頼殺人ですかね？そうだ、クレジットの名義は誰だったんですか？」コロンダ君は目を輝かせた。「あ～、クレジットは亜理紗の弟昌樹のものだったよ。会員手続きに記載された氏名、住所、電話番号すべて弟のものだった。弟はまだ高校生で、亜理紗は弟のために福銀に二つの口座を作っていた。普通と積み立てをね。お客の男は弟名義のクレジットを持って店にやってきたわけだから、亜理紗とはかなり親密な関係にある男と考えていい。となれば、お客は彼氏ということになるんじゃないか」本部長は目をつぶってしまった。

「昌樹君は何か知っていませんでしたか？」愚問と思ったが話すことがなくなってきたため聞いてみた。「亜理紗には成績優秀な弟と妹がいるのだが、二つ違いの妹は京都の大学生だ。昌樹君は糸島市の実家で母親と暮らしているのだが、亜理紗が男を連れてやってきたことは一度も無く、また、結婚の話も聞かなかったそう。母親も妹も彼氏の話は一度も聞いたことが無かったそう。どうして、あんなに美人なのに、まったく男関係が無いとは、そのことのほうが不思議だよ。なぜ、彼氏がないんだ。コロダ君、どう思う？」本部長は立ち上がるとブランディーを取りに行った。

「やはり、ホシはお客と思うのですが、そのお客を探し出す手がかりがまったくないとなれば、警察も困りましたね。もし、依頼殺人であれば厄介なことになりますね」コロダ君は新しいストーリーを考えていた。「あ～、結婚する予定だったが、できなくなる事情が持ち上がり、佐伯が殺し屋に亜理紗殺しを依頼したと言いたいんだろう。考えられなくも無いが、これは無いだろう、亜理紗の結婚は金目当てだから、手切れ金で方がつくはずだよ。殺人となればお金では解決できない感情の問題だ。憎しみだよ！」本部長もホシは佐伯以外の本命の彼氏だと思っている

。

「確かに、憎しみと思います。でも、どうして男関係が出てこないんでしょうか。どこかにきつと、佐伯正一以外の彼氏がいるはずですよ。そうでなければ殺人の動機がさっぱりわかりません。まさに、謎ですね」コロンダ君は亜理紗という女性に興味がわいてきた。

「亜理紗のことでもっと知りたいんですが、教えていただけませんか？」コロンダ君は手を合わせてお願いした。本部長はこの辺で話を打ち切ろうと思っていたが、酔いが回ってくると口が軽くなる悪い癖が出てしまった。「男の手がかりがまったくないわけだよ。だから、彼女が卒業した中学校に出向いて、バレー部の顧問の先生に話を伺ったよ。彼女はバレーボール部でセッターをやっていてね、県下でも数少ない名セッターでH高校に特待生で入学したんだ。

そのとき、特待生ではないが一緒にその高校に入学したのが親友であり、アタッカーだった篠田ゆりだ。余談だが、ゆりは、第七学区のトップ高校に合格できるほどの優秀な成績で、S高校の校長をしている父親はS高校への進学を何度も勧めたが、頑として聞き入れず、亜理紗についていったそうだよ。

まあ、二人は高校でバレーボールに青春をかけていたんだが、亜理紗が高校1年生のとき、看護師の母親と薬剤師の父親が離婚したんだよ。卒業後、篠田ゆりは美容師専門学校に進学したが、弟妹の学費のために亜理紗は進学せず就職をした。その後、ひそかに風俗業に転職した。篠田ゆりは博多駅近くにある美容院で働いている。

篠田ゆりの話によると、勝気な性格で、弟妹を大学まで進学させてやるには、風俗以外ないと言っていたそうだ。この話からすれば、お金のために風俗をやって、21歳年上の佐伯正一との結婚もいやいやながら承諾したと思われる。本命の彼氏がいたならば亜理紗もつらかったはずだよ。亜理紗は弟妹の学費のためにやりたくも無い風俗を鬼になって頑張り、涙を凍らせて彼氏に別れを告げ、愛の無い結婚も承諾したんだな。その結果、殺されたわけだ。それを思うと涙が出てくるよ。いったい、本命の彼氏はどこにいるんだ」話し終わると一口ブランディーを含み、喉をグウィッと鳴らして流し込んだ。

「弟妹の学費のために。亜理紗は男のようですね。いや、男以上ですよ。ところで、篠田ゆりさんはどんな方ですか？」男のような亜理紗と子供のころからの親友であるゆりに興味がわいてきた。「ゆりさんね。美容師をしているだけあって、おしゃれでセンスがいいね。ブロンズのロン毛で、面長で、鼻が高く、マニキュアのデコが可愛かったよ。かつて、バレーボールのアタッカーだけあって背は僕より少し低いぐらいで、肩幅もあって、足も長くて、ピンクのスラックスが良く似合っていたよ。お嬢さん育ちみたいで少し神経質だったな。まあ、こんなところだ」本部長の口調は浪花節になっていた。「実際にお会いになったみたいなお話ですね」コロンダ君は酔った本部長の姿が可愛く思えて、皮肉を言ってみた。

「あ、すまん、酔うと妄想が働いて、つい、感情を込めてしまった。だが、調書を思い出しながらしゃべったのだから、間違いは無い。他に聞きたいことは？」なぜか、ゆりの話になると笑顔になった。「肝心の、お客の風貌はどんな感じですか？」コロンダ君は思い出したように言った。

「防犯カメラに写っていたお客は、背丈は175センチぐらいで、顔は浅黒く、面長で、金縁の眼鏡、体型は肩幅が広く、長い脚、頭はオールバックのショートヘア、服装はブルーのビジネススーツ、大手のエリート社員って感じだな。タカラジェンヌみたいにかっこよかったよ。もしかしたら、東京の人かもしれんな。あんな、かっこいい男は福岡にはおらんだらう。出張のたびに、亜理紗とデートしていたのかもしれない。今頃は、海外に転勤しているかも知れんぞ。そうだとすれば、ますます、厄介なことになる」ホシの話になると目がギンギンになってきた。

「最後に一つ、亜理紗に生命保険がかけられていませんでしたか？」最近よくある保険金殺人ではないかとふと思った。「あ～、そ～、なんと、5000万円の生命保険に加入していたんだよ。受取人は当然、母親なんだが」本部長は納得いかない顔で首をかしげた。

「いろいろとお話くださって、ありがとうございました。この事件は福岡県警に任せましょう。僕は違った角度からこれを題材に小説を書いてみたいと思います。もうこんな時間ですか。明日は、糸島をエンジョイします。白糸の滝に行ってみたいですね。本部長、どうですか？」コロンダ君は糸島が気に入っていた。「いいとも、君も将来は糸島に住みんしゃい、ワハハ～」目を細くして博多弁をしゃべった。

お菊さんのひらめき

東京に帰ったコロнда君は書斎でぼんやりと事件について考えていた。彼は事件を解決しようとしているのではなく、この奇妙な事件を題材にした小説の構想を練っていた。その時、コンコン、とノックがなると、家政婦のお菊さんが二人分のコーヒーとチーズケーキを運んで入ってきた。「お坊ちゃん、また、妄想ですか。冷えないうちにこちらへどうぞ」テーブルにコーヒーを置くとお菊は椅子に腰掛けコロнда君を待った。

「ありがとう、頂くよ。おいしそうなチーズケーキだね」コロнда君は大好物のチーズケーキを口の中で溶かすとニッコリした。「今度はどんな妄想ですか？お坊ちゃんは小説家にでもおなりになるんですか？邪な心を早くお捨てにならないと、出世が遅れますよ」お菊はコロнда君の現実逃避をたしなめた。「そう、きついことを言わないでくれよ。ところでお菊さんに聞かせたい話があるんだ」コロнда君は本部長から聞いた事件の話を簡単にポイントだけ話した。

「へ～、奇妙な事件じゃないですか？相当、深い関係にある人の仕業ですよ。私も、彼氏が犯人だと思いますが、まったく男関係が浮かび上がらないとは奇妙ですね」お菊はコーヒーを一口流し込んだ。「そうだろ～、奇妙なんだ」コロнда君もコーヒーを一口流し込んだ。「こんな妄想はどうですか。麻薬取引にかかわっていた亜理紗さんは、いつか自分が殺されると思っていた。そこで、母親を受取人にした生命保険に加入した。その不安は不運にもクリスマスに的中した」お菊の顔はドヤ顔になっていた。

「なるほど、麻薬取引か・・・思いつかなかったな～、と言うことは殺し屋の仕業と言うことだな。だけど、殺し屋が亜理紗の弟のクレジットを持っていたというのは不自然じゃないか？」コロнда君はクレジットのことが一番気になっていた。「うっかりしていましたわ。クレジットですよ。この謎が解ければ事件が見えてきますね。お坊ちゃん」お菊の大きな眼がさらに大きくなってきた。

「そうなんだ、クレジットを亜理紗から渡されたと言うことは、自由にお金を使っていいということだろ、こんな関係の人物って誰だろうか？携帯履歴もすべて調べたらしいが、それらしき人物は出てこなかったらしいからね」コロンダ君は残りのコーヒーを一気に飲み干した。「しかも、そのクレジットは亜理紗さんの右手の上に残されていたわけでしょう。はっきり言えることは、金目当ての殺人じゃないということね。それどころか、保険金5000万円が母親の手に回り込んだんですからね」お菊は保険金を気にしている。

「言い方は悪いけど、亜理紗が死んで得をしたのは母親だ。だけど、母親は犯人じゃないだろ。偶然、母親に大金が回り込んだに過ぎないと考えていいと思うな。いったい、なぜ、亜理紗さんは5000万円もの保険に加入しようと思ったんだろうね？」コロンダ君は新しい疑問を口にした。「そうだわ、加入経路を調べてみてはどうかしら？」いつものひらめきが飛び出した。

「お～、それはいい考えだよ、さすが、お菊さん。きっと、警察も調べていると思うけど僕も念のために話を聞いてみよう」早速、電話で聞いてみることにした。G生命博多支社に問い合わせたところ、彼女の保険は博多南支部の木島洋子の取り扱いとということがわかった。コロнда君はその支部に電話し彼女から直に話を聞いた。

「お電話では失礼とは思いましたが、木山智子さんの加入手続きをなされたと言うことで、一つ、お伺いしたいのですが。加入はどのような経路でなされたのでしょうか？」コロнда君は単刀直入に質問した。「はい、警察の方にもお話しましたが、篠田ゆりさんの紹介で加入していただきました。ゆりは私の親友で、ゆりにも加入してもらっています」明快な返答をした。

なんと、篠田ゆりが絡んでいた。ゆりはなぜ生命保険に加入させたのか？申込日は11月1日となっている。そして、翌月に殺されている。やはり、保険加入は殺人と関係あるように思えてきた。おそらく、警察は篠田ゆりにも話を聞いているに違いないと思ったが、ゆりさんに話を聞けば何かわかる予感がした。電話で聞けば簡単なのだが、きっと、洋子のノルマ達成のため智子を紹介したと言うに違いない。コロнда君は直に会って話を聞くことにした。

早速、マルキーズ博多店に電話すると、ゆりは糸島市前原にあるマルキーズ前原店で勤務していることがわかった。ゆりと連絡を取ったコロнда君はゆりが指定した二丈にあるカフェで11時30分に落ち合うことにした。コロнда君一人で会うと誤解される恐れがあるので、いとこの笙子を連れて行くことにした。BMWのZ4に乗った二人がカフェに到着すると、ゆりは窓際の席で外に広がる畑をぼんやり眺めていた。

アンティークなドアを押して中に入ると、窓際に座っているブロンズの女性が二人の目に飛び込んできた。「あの人ね」笙子はささやいた。二人は窓際のゆりに近づくとコロダ君は挨拶した。「はじめまして、警察庁の野秀文と申します。こちらは、いとこの笙子です。こちら、よろしいですか？」二人はゆりの正面に腰かけた。「智子のことは警察にお話しました。もうこれ以上お話しすることはありませんが、なにか？」ゆりは警察庁と言われてもピンと来なかった。インテリ風の若者を東京の刑事と思った。

「いろいろと、ご迷惑をおかけいたしました。警察はぶしつけでいやな思いをされたことでしょう。私は刑事じゃありませんが、一つだけお聞きしたいことがあります。食事しながら、いいでしょうか？」パスタランチを注文すると山盛りの野菜が運ばれてきた。「わお～、これはすごい、新鮮な野菜が山盛り！」コロダ君は笑顔でゆりに語りかけた。「とっっても、ここのランチ、評判がいいんですよ。私もよく食べに来るんです。ところで、お聞きになりたいことって何ですか？」ゆりは何を聞き出しに来たのか不安に思っていた。

「生命保険のことです。ゆりさんが紹介されたとのことですが」ゆりの目を見つめ質問した。一瞬、表情が固まったが、即座に答えた。「洋子のノルマ達成のために紹介しました。それだけのことです」ゆりはフォークを置くと二人を睨みつけた。「そうでしたか、智子さんはとても弟思いでいらして、弟さんには何でも話をされておられました。弟さんのお話では、結婚の予定があったとか？」コロダ君は探りを入れた。ゆりの顔が、真っ赤になった。「え、初めて聞きました。そんな大切なこと、黙っていたなんて」ゆりの手が少し震え始めた。

「亡くなられた智子さんのことを思い出させてしまいまして申し訳ありません。ここの豆乳パスタ、クリーミーでとってもおいしいですね」コロダ君は話を替えゆりの反応をうかがった。ゆりの緊張は全身に走っていた。「お聞きしたいことは、それだけですか？」ゆりは威嚇する態度をとった。「はい、それだけです。糸島はいいところですね。親戚が前原にいるもので時々遊びに来ています。これから、二人で遊びに行きます。ゆりさんもどうですか？」ゆりを誘ってみたが、あっさり断られた。

「ゆりさんって、硬い感じの人だったね。笙子さんはどう思われました？」女性の直感を確認してみた。「いやな感じ、友達にはしたくないタイプね。それよか、これから、どこ、行こうか？」笙子はZ4のハンドルを握ると急発進した。「会えただけでも、とても参考になったよ。なんとなく、小説のイメージが湧いてきた。いい休暇になったよ。笙子ちゃんともデートできたし。姉子の浜にでも行って気分転換しようかね。レッツゴー！」コロンダ君は右手を突き上げた。

同性婚

ソファに腰掛けたアンナの後ろから、さやかはバク乳でこった肩を小さな手でもんでいる。拓也の種をゲットできなかったアンナを慰めながら、赤ちゃんへの思いを語る。「赤ちゃん、早くほしいわね。アンナ、拓也がダメならドクターで手を打たない。ロボットみたいだけど、意外とすぐに手を出すかもよ」さやかはドクターに照準を替えてきた。

「拓也のやつ、ダメなやつ、意気地なし、見損なったわ。こうなったら、手っ取り早く、精子バンクでゲットしようか。早く、赤ちゃん産んで二人で育てたいよ。とにかくアメリカに行こう！」アンナは妊娠した自分の姿を思い浮かべている。「アンナ、そうよ、バンクでゲットよ。欧米では同性婚を認めている国や州が増えているってのに、日本はまったく無関心なんだから。日本人って頭が固いよね、同性婚を認めないなんて。まあ、世間がなんと言おうと、二人の絆はあの世まで永遠だからね、アンナ。新婚旅行の段取りを立てなくっちゃ」さやかは早速ドクターにそのことをメールした。